

大正十五年一月元旦

午前十時より拝賀式あり一同学校に行く。

別段変わった事も無し。總長と体操教官の金色燦然たる大礼服が眼に付いた位のもので、一人貰ってきて何処かに飾って置きたい気がする。ピンポン、トランプに耽る者甚だ多し。

二日 夜七時頃より宮部先生の宅に行く、種々御馳走に与って感謝に堪えなかった。一同歡を尽して舎に帰った時は一時だった。

三日 朝より猛烈なる吹雪にて尺寸を辨ぜざるほどなりしが、午后に至りて漸次衰退す。ほとんど總ての者が円山にスキーに行った、中々愉快、壮快であった。

八日 愈々今日より学校が始まるなり。去年の二十日頃を回想して感慨無量なり。午前十時頃、矢田、近藤、平川、川島、福富の五君三角山に登る可く出発した。無事、行を果して五時半一同帰舎、余っ程腹がスいていたと見へて、帰ってきてライスカレー三皿（山盛り）餅約十個、蜜柑十五個喰って始めて言語を発し、物の味を知り意識を回復したものが二、三人在った。今日、宮脇、平野の二君夫々とかち、みちのくの田舎より帰舎す。因に、この休み中に平野君の家にボヤあり、風呂場を焼きし由。

十日 朝の急行で笹部、佐々木の二君帰る、乳飲んで来たせいか、年を一つとった為か中々元気に見えた。夜に至って濱本、平野の二君帰舎さる。寄宿舍も愈々賑しくなってきた。

十一日 朝の急行で柴内君帰舎す。夜は帰舎した人々の土産披露コンパがあった。

十二日 伊藤君朝、時田君夜夫々帰舎さる。

十三日 朝の急行で新任青年寄宿舍食事部委員長伊勢田君着任。今日は馬鹿に暖い天候なり、時々雪とも雨とも分らぬもの降り来る。

十六日 寒気の烈しき日なり。伊東君一身上の都合でしばらく外泊する為寄宿舍を出られる。

二十日 今日より向ふ一週間ピンポンの紅白試合あり、その成績左の如し（略）

二十八日 平戸君父上病気の電報来り帰省せらる。

二十九日 軍事教育の査閲ありたり。

三十日 月次会を催す。先生も見えず先輩も少いので堅苦しい話はそこ□□にして、直ぐさま閉会をやって後は粹にさばけてトランプ、カルタの興じ時を過した。

三十一日 永い間、我々を喜ばして呉れたロブが突然死んだ。悼む可しである。

二月四日 秋田北盟寮とのピンポン試合あり、成績左の如し。（略）

六日 午後一時より恒例の舎内ピンポン大会を催す。成績左の如し。（略）

七日 寄宿舍運動部主催のテイネ登山あり、参加者僅かに笹部、近藤の二君なりしとは残念なり。

十日 かねて帰省中の平戸君夜の急行で帰舎さる。

二十六日 金曜日、午後六時半より波木居、奥田、山田、矢口、江尻の五君の卒業祝賀兼

送別会を催す。宮部先生始め、前川、小田切、安達、笹部、笹田、亀井、今井の諸先輩見え、中々の盛会だった。十一時頃歓喜の中にも一種云ひ難き寂しさを残して閉会す。

三月十日 午後九時頃、豚の子九匹出産す。

十四日 此の間生れた豚児九匹、介抱のかひもなく全部死んでしまった。

十五日 夜の急行で矢口君帰省さる。しばらくして水戸の聯隊に入営さる由。

十八日 夜、月次会を催す。先生、亀井先輩出席さる。九時頃会を閉じ、副舎長及び各部委員の改選を行ふ。

副舎長 時田君

会計部 - 樋浦君 食事部 - 平川君

運動部 - 笹部君 衛生部 - 宮脇君

文芸部 - 平戸君

二十日 多勢君夜の急行で帰省さる。

二十一日 杉本、宮脇君朝、平川君夜帰省さる。

二十二日 夜の急行で平野君帰省さる。

二十六日 夜は佐々木君の手で作られた飯を焼いて味噌をつけた信州独特の料理を喰った。神武の太古に帰った様な気がした。

二十七日 今日より畳屋来り畳の表がへをなす。

四月一日 朝の急行で江尻、平戸両君夫々帰省さる。

四月八日 近藤卷三君退舎さる。

四月九日 工学部予科二年類地初太郎入舎せらる。

四月十日 福富退舎 朝根室より多勢君帰舎せらる。夜十時平野、柴内両君帰舎せらる。

四月十一日 朝七時杉本君帰舎せらる。

四月十二日 七時の急行にて笹部君帰らる。

今日、小樽新聞に寄宿舎の恩人石澤先生の逸話を載せたり。左に掲げん。(略)

四月十四日 新聞は富山県新庄町の大火を報ず。場所は奥田君の家の近くなれば大いに心配す。幸、無事の電報到達し胸なで下す。

夜、川島君(昨十三日夜帰舎)退舎に付き、一同と一室に茶菓を共にして語る。

夜、平戸君帰舎さる。

四月十五日 時田君より引受く。夜、平川、伊勢田両君帰舎さる。

四月十七日 伊勢田実君退舎さる。一室に会して一同歓談す。夜の急行にて安達仁氏独逸留学の壮途に向はる。一同停車場に氏を見送ったり。洋々たる前途を有する氏よ益々多幸なれ。

四月十八日 本日午後、荘保忠三郎君(大阪、農予一)入舎せらる。夜農実一年野村虎雄君入舎せらる。若き人々を迎へて元気溢る。

四月十九日 今朝七時一斉に部屋替抽籤を行ふ。予科の入学式ありたり。雪まじりの雨降りて寒気甚し、二月の空を思い出す。

四月二十二日 夜、浜本君帰舎せらる。

四月二十三日 徴兵検査のため宮脇君帰省せらる。新聞紙上よく各地の大火を報ず、火の用心肝要なり。

四月二十四日 浜本君本日徴兵検査の結果、丙種合格の由悲しき極なり。

四月二十五日 笹部三郎君検査ノ為メ本日朝ノ汽車ニテ東上サル。本日札幌堂ニテ有島全集十二冊ヲ求ム。温キ雨降りテ漸ク春ハ来ル。

四月二十七日 夜宮脇君帰舎セラル、第二乙種輜重輪卒トナラレタ。

四月二十八日 奥田義正氏退舎セラル。我舎ノ重鎮トシテ永イ七年間ヲ起居サレ、殊ニ副舎長ヲニヶ年モ勤続サレ舎ノ為メ碎身奔走以テ今日ノ我舎アラシメタノハ氏ノ功績ニ負フ所大デアル。萬腔ノ謝意ヲ表スルト共ニ益々多幸ナラン事ヲ祈ッテ止マナイ。

四月二十九日 歓迎会ヲ兼ネテ新学期月次会ヲ開ク。委員ノ努力ニヨリ大イニ満腹ス。宮部先生、鈴木、亀井先生、今井、奥田、土居三先輩出席下サル。類地君ハ大震災ノ痛烈ナル追憶ヲ述ベラレ、種々苦勞の貴イ体験ヲ述ベラル。四、五度モ生命ニ係ル大事件に遭遇セルモ皆難ヲ逃レタ。先ヅ償トシテ何事ヲカ為サズベカラズト結ブ。莊保君ハ極メテ快活ニ個性ヲ披瀝シテ萬場ヲ笑ハス。野村君アッサリ自己紹介ヲスマス。浜本、平戸、平川三君代る□□歓迎ノ辞ヲ述ベラル。土井君、奥田君等交々雄弁ヲ奮ハル。今井君“生ノ連続ハ天才也”ヲ高唱サル。亀井先生アッサリ歓迎の辞ヲノベラル。鈴木先生我舎ノ氣風ヲ讚美シテ極メテ詩的ニソノ觀察ヲノベラル。宮部先生又我舎ノ氣風ハ札幌農学校ニ其ノ儘ノ性格ヲ保テル所以ヲ説明サル。禁酒禁煙ノ題目ハ遠ク、クラーク先生ニソノ源ヲ発スル事ヲ明細ニ御説明アツタ。ヘボ抜キニ興ヲ尽シテ散会ス。

五月三日 夜笹部君帰舎セラル。第一乙種ナリト。

五月四日 予科（医）三年中川一郎君入舎セラル。午後予科化学実験室焼く。

五月十四日 朝我が大学ハ高松宮殿下ヲ迎へ奉ル。午前十時記念祝賀会堂ニ於テ高松宮御臨席ノ上、大学創起五十年祝賀ノ祝典ヲ挙行ス。会衆約三千、内外ノ名士ヲ網羅シテ、ソノ盛運ヲ祝フ。總長ノ式辞ニ始リ各部長、岡田文相、貴衆兩院々長、札幌市長、卒業生總代、在学生總代（時田君）等ノ祝辞朗読アリ。正午閉式、午後一時半ヨリ、クラーク先生銅像除幕式行ハル。学内展覽後、殿下ニハ三井別邸ニ御帰還遊バサル。夜校庭ニ集合シ各科技ヲコラセル萬燈ヲ照シテ盛ナル提灯行列ヲ行フ。為メニ全市灯ノ海ト化シ祝声天地ヲ震フ。

五月十五日 記念トシテ中央講堂ニ記念講演会開カル。先ヅ高岡教授植民地ニオケル大運動ト題シテ演ジ、東大、鈴木梅太郎博士ハ化学ノ未開地ヲ論ジ、東北大本田光太郎博士

八日本刀ノ切味ニ就テ演ゼラル。

午後、今博士ノ生体染色、宮入博士ノ始ガ大切、永井博士ノ化学発達ノ過去回想ニ就テト題スル講演アリ。

夜、大学ノ現況、アイヌノ結婚式ノ活動写真中央講堂ニ見ル。

五月十六日 運動会新設グラウンドニ挙行サル。

中央講堂ニテ八引続キ田辺朔郎、倉塚博士ノ講演アリ。午後一時後藤新平氏ノ演説、永田秀次郎氏ノ演説アリ。

五月十七日 午前五時起床、吉例花見ヲ円山ニ行フ、一行十五名。

五月十八日 本年度卒業ノ先輩諸兄ノ寄与ニヨリ、一同有合亭ニ会シテ宴遊会ヲ催ス。

各氏ニ愉快ナルヨセガキヲ駄句ウツテ六時散会、七時ヨリ中央講堂ニテ体育活動写真アリタリ。

五月二十五日 十勝硫黄嶽爆発の為メ、大山津浪ノタメ上富良野一帯泥海トナリテ多大ノ損害アリタル由報ゼラル。被害三百万円、人死百七十名。

五月二十八日 月次会ヲ開ク。宮部先生、犬飼先生出席セラル。御手際ノ料理ニ満腹ス。

中川君ノ歓迎ヲ兼ネテ演説ニ移ル。抽籤投票ノ結果左ノ如シ。

- 1 . 若者 笹部君
- 2 . 一ツノ感じ 時田君
- 3 . 上富良野爆発ノ地質学的考察 平川君
- 4 . 池ノ蛙 野村君
- 5 . 植民地ニオケルニ大運動ヲ聞キテ 浜本君
- 6 . 近頃の生活 宮脇君
- 7 . 旅行談 中川君
- 8 . 春 平戸君
- 9 . 札幌ノ午後十二時過の散歩 平野君
- 10 . 五十年前と内村鑑三 類地君
- 11 . 大爆発 樋浦君
- 12 . 日曜日ハ如何ニ過スベキカ 佐々木君
- 13 . 五月二十七日 柴田君
- 14 . 法医学ノ将来 多勢君
- 15 . 故郷ヲ離レテ 荘保君

犬飼先生ハ近代ノ学生ガ孤立ヲ好ム傾向見テ難ゼラル。

宮部先生ハ直ニ、ヴィクトーリヤ、レヂヤニツキテソノ植物学的觀察ト由来トニツキテ精シク述ベラル。十時半散会。

六月六日 非常な快晴、目に青葉、山郭公、実に貴い初夏の一日である。鈴蘭狩に一番槍をつけるもの、月寒、真駒内に遊ぶ者、殆ど皆それぞれの楽天地へと赴いた。

六月二十八日 今学期最終の月次会を開く。

犬飼、亀井、中島諸氏出席下さる。

時田氏、挨拶として今学期収穫の何物かを得んため後一ヶ月の生活を大いに緊張裡に過

さんことを希望して退く。

佐々木氏、発、受と云う問題につき、えらい孔孟を引張り出す。莊保氏、中学時代の教師の教訓を思い出し、精神一到何事か不成を高唱す。

笹部氏、近頃の感想として雄弁を振ふ。先づ五十年記念の大学の処置につき不満を述べ、吾人学生をよりよく札幌農学校的に教へんがためには歴史を教へざる可からずと説き、沿革史を頒布せざる不満を説く。又胸像につきても、クラーク氏の面前を通行するに一顧をも与えざる者多きをなげき、その無意味を難ず、痛快なる攻撃なり。中川氏、化学を学ぶ者として文芸を理解せざる可らずとて、伝説神話の研究の面白き事を紹介す。

類地氏、樽前旅行の思ひ出を話す。

浜本氏、人生問題につき少しく意見をのべらる。

多勢氏、二つの吊瓶の例を引きて人生を考へんとせしも一寸つかて退くは愛敬。

野村氏、ある人の話によると、北海道人の元気あるに引きかへ、内地から渡れる人間は大人ぶり甚だ元気がないとの観察を得て大得意。

中島氏、名よりも実を高唱さる。

犬飼氏、中島、亀井両氏が在舎中、大人ぶってたことを披露し、人生観に入るや、人事を尽くして天命を待つと喝破して降壇。

亀井氏、犬飼氏の若かりし時、ホームシックに煩々たりし様子を披露し、当時の生活振りを面白く話された。

平戸氏、今夜の問題、人生価値につき小意見をのべ閉会を宣す。

委員の改選結果左の如し。(略)

七月一日 朝樋浦君実習のため江別方面へ出発。長い間募集中のメタル模型を発表せり、集る投票数十三、大した傑作もなきようなり。夕方宮脇君旅行の為出発す。

七月三日 予科試験始る。苺売り声漸く高し、愈々夏は深し。天候不順。

七月四日 柴内君帰省さる。

七月五日 メタル模型多勢君作鐘形当選す。

七月六日 夕平野君帰省さる。

七月七日 樋浦君一週間の労働へ夕方帰舎。

貴き極印は面全体に真黒に現はれ、我々青白き輩は俊に瞠若たり。

七月八日 朝平戸君帰省さる。

運動部にては数日前より庭球に準硬球を採用せしが甚だ評判良ろしく、明日の試験もそっち除けにて熱中する向き多し。

七月九日 浜本、樋浦両君朝帰省、予科試験終了。

七月十日 朝野村君、正午類地君、夫々旅行に出発、夜、多勢君帰省さる。

七月十一日 中川君、今後十日程豊平の林ゴ園にて働かるる由、浜本君朝七時急行にて帰る。

七月十二日 笹部君同じく豊平にて労働さる。

従って舎内は急に淋しくなる。残留は四名。

七月十四日 夜十時の急行にて莊保君根室へ、所謂夏期労働に。最後まで働き通されんことを望む。夕風凧ぎ蒸暑し。

七月十六日 夜佐々木君帰省さる。寄宿舍愈々寂寥たり。玄関も二重に戸締りす。

七月十九日 朝の急行にて時田君樺太へ。夜宮脇君帰舎。

七月二十日 朝の七時の急行で多勢君帰舎せらる。夜旅行さる。中川君午後帰舎、平川君豊平の林檎園に赴かる。夕中川君帰省さる。

七月二十二日 夜野村君帰舎。

七月二十三日 舎生皆炎天の中とは云へねど暑きに拘らず、なつかしき父母の膝下にかへり、又は楽しき旅に出で立ち、広い舎には二人きりになり。此の日、今から二十数年前、中学に通はれ今は自動車会社の専務取締役として邦家のために貢献なされて居られる森四郎氏並びにその時代共に居られ、今札幌に居られる青木三哉氏の二先輩の訪問を受く。昔をしのびて誰君はこの辺の室だ。君は此処だと記憶をよみがへらせつゝ見に行かる。洗面所の処に昔風呂ありしを思はれ、銭湯などに行かずに風呂場を作れと云ひ残され、尚最後に二人に向って「しっかり勉強し給へ」とて立ち去らる。

七月二十四日 夜平川君帰舎。

七月二十五日 夜又々労働に行かる。

七月二十七日 豊平川、笹部両君長の労働から元気にみちて帰舎す。

七月二十九日 大部暑かった空も今日は雨をもたらず。水を欲するの地方争ひぞ止みたるならん。

七月三十日 硬球ボールはやる此頃、久方の雨さぞ惜しかるべし。さはあれどピンポンに耽り欲を満す者あり。舎生半数に及ぶ。一人平川君病む、何か当りたるらし。然し、大した事なきは嬉し。

七月三十一日 会計の任務としては大げさなれど、支払ひする役を務める日の目のまわる程の忙しさ。なるほど今日は三十一日だ、明日は博覧会が開かれるのだ。

八月一日 国産振■博覧会始まる。笹部君一番駈けをなす。

二日 朝笹部君帰省さる。多勢君同列車にて帰舎さる。晝食后岩見沢に向って宮脇君出発、何事かなすあらんとして。

六日 豊平に開かるゝ納涼大会にぎわし。

七日 宮脇君晝過ぎ帰舎さる。

十三日 平川君林檎園の労働終りて間もなく又文武会の夏期学校に熱心に努力せられ終りて一先づ安心して居りたる処、本朝電報にて家よりすぐかへれとの事。六時の汽車で出発された。変りたる事なきかと心配して去る。変りないを祈る。

二十三日 晩柴内君帰舎、実習のため。

二十五日 朝食后柴内君上音威子府に向け出発さる。

二十七日 在舎生に大変動あり。早朝野村君は帰省の途につかれ、宮脇君は約二週間の計

画にて苦小牧に赴かる。(昼)為めに寄宿は多勢君独りとなり文芸、運動、食事、衛生、会計及び園芸の諸部を兼ねる。七月中旬以来根室牧場にて労働中の荘保君が入り換りに元気な顔を見せる。同君は羊舎と牛舎についての研究を重ねられ、御土産には自製のバターの御馳走あり。甚だ美味。

二十八日 野村、平野、多勢氏等の丹精の朝顔初めて一輪咲く。

二十九日 荘保君乗馬に余念なし。

三十日 荘保君八月以降腹具合悪しく、本日大学病院の診断により脚気とのこと、本人俄かに足重く病人らしく見ゆ。軽症なり。

三十一日 早朝の急行にて佐々木武尚君帰舎せらる。昨日で終わった国産博を惜まる。

今年の八月を通観するに吾札幌実に騒然として俗界の気分多かつた。国産博のために日々飛行機やら花火やらうるさく飛ぶ。

而し一方に夕方の如き在舎生連れ立って或は豊平の納涼会に、或時は国産博の石井清一行の舞踊に歩を運び何時もたいくつする体を慰めるよすがにはなつた。暑さも内地は何十年来の酷暑に対し、札幌では今迄にない程凌ぎ易く各自勉励したことを特筆する。

九月一日 予科の第二学期開始、寄宿中未だ三人の所、朝笹部君帰舎せらる。裏の花壇の草花、諸兄の帰りを待つこと久し。夜には杉本君の帰舎あり。總勢五名。

二日 予科授業開始さる。

三日 杉本君、賄の小母さん等腸カタルをやり、ミサ子はよく働く。

四日 夜茶菓の談笑にありし時、時田君突然帰らる。同君は海藻採集のため遠く樺太にあり、山なす収穫をひっ下げて小樽に上陸、大元気にて寄宿に飛び込みたるものなり。十一時頃迄もアルペンシンフォニー等を楽しむ。

五日 早朝、帰省中なりし平川、平野両君帰舎せらる。帰るを待つこと如何に切なるかは皆早朝起出でて迎ひに出たるを見るべし。

六日 朝の急行にて時田君蒼惶として帰省せらる。

七日 朝ヒョッコリ中川君の帰舎あり。

八日 午後四時十勝岳大爆発をなし登山中の田中館講師危く難をまぬがる。山頂にありし二名の入夫行方不明の由。

十日 十勝岳又もや爆発す。菊地助教授の紹介にて農芸化学科専科一、大谷義夫氏仮入舎せられ四号に荷をとかる。(夜)同氏は鳥取高農の出身なり。

十一日 午前十時の下りにて平野君及び大谷君は地勢見学のため十勝岳方面に出発せらる。化学一年の旅行なり。爆発を耳にする折、二君の安全を祈る。午後予科対小樽高商競泳大会に(中島プール)三十二対九で大勝す。宮脇君は八日苦小牧の実習を終へて後登別に豪遊三日にして本日昼に帰舎せらる。それに引かへ柴内君は連日の実習に疲労の色を浮べて天塩の演習林より夕方帰舎あり。夜七時よりエンゼル館に於て露国の提琴家ギリス・ラス氏来る。堂々たる曲目を奏でるテクニックと音の軟かさは感心に堪えたり。氏の楽器は二、三百年前の製作にかゝり、嘗て同氏が露国皇帝よりの拝領と承る。夜の急

行にて先輩犬飼氏はロックヘラー研究所の招きに応ずべく夫人同伴にて出発せられ、舎生一同駅頭に送る。

十二日 午前舎生總動員にて池畔のクルマの採集をなす。

十三日 夜浜本君帰舎せらる。連日の海水浴のため黒さに於ては柴内君を凌ぐものあり。

十四日 秋将に深からんとす。午前快晴の天候、午後には豪雨あり。そぞろ歩きに満点の星をあふぎて室に入れば、梢より落ちる雫の音高し。聞ゆるは虫声と柝声か。

十五日 夜平戸君帰舎さる。同君休暇中の收穫は写真術であり、ことに人物撮影に於てはくろうとそして瞠目せしめるものありと漏れ承る。夜大谷君、十勝岳爆発見学より帰舎さる。

十六日 夜、樋浦君真黒い顔をして舎に姿を表わす。やがて平野君十勝岳地勢見学より帰らる。其の日々、光景の凄惨実に彷彿せしめる感があった。色々と話の花を咲かす。

秋夜は静かに更け行く。九時半の急行にて時田君帰舎さる。之で舎生の殆んどが帰って来た。

十八日 農芸化学科一年生大谷義夫君九月十日附にて入舎せらる。

二十日 早稲田大学総長高田博士の講演が午前十一時より佐藤総長の東北弁まる出しの「ずうずう」にて諧謔を交えた紹介に始まった。高田博士は、早大教旨たる「□学問の自由 □学理の活用 □模範国民の養成」を演繹して語られ、特にエリオット博士の大学の本旨は To make man に尽きると言ふた言葉の至言なるを痛切に思ふ。然して現代吾国の大学がどうかを見ると、考えさせらるゝ事が多々あるように思う。

二十一日 夜七時頃より同勢十三名異人様の装束をしてポプラ街道側にて月見の宴を張る。食ふは実に西瓜、豆、月見だんご、芋の大半を尽す。月は皎々として秋空に高し。

実に宇宙の神秘壮大壯麗の感に打たる。

一座声なく虫の音も微かなり。九時頃、引具して(残物を)帰舎す。

二十二日 夜こっそりと野村君帰舎さる。之にて寄宿舍生全部帰舎して賑かになって来た。

二十三日 多勢君定山溪に於ける級会に赴かる。

二十四日 お彼岸の中日、今日こそぼた餅にありつかんとしたるが、舎に残る者少く、或る者は芋掘りに、或る者は散歩に、或る者は庭球に、思ひ□□後の活躍を記していた。いよ□□食事部の選になるぼた餅にありついた。如何に大食漢を以って任ずる者も残す位であった。時に驟雨沛然とふる。

夜多勢君帰舎さる。

二十五日 平戸君オショロに見学に行かる。

二十七日 平戸君オショロに於ける動物実験を終えて帰舎さる。

三十日 親日家として、又アメリカ在邦人の間に父として尊敬されておるストウジ博士の講演会が時計台に於て開かれた。「国際精神と教育の理想」に就て約一時間に亘り熱弁を振はれた。其の論旨は、先づ吾界は一つである、吾界は神によりて全てが造られたる



一つの家にして、各国、各民族は只に其の家の各部屋に過ぎない。而して善と正義と温情とに於て平和の吾界の来る事を、又国際精神の向上に関して、同一なる宗教、統一せる貨幣、統一せる言葉の要求を力説された。次に理想の教育に於て、体育、知育、徳育（Soul）の完成にある事を力説さる。」

冷かさ、寒さ、身体がビリ□□とケイレンを起す位である。空の花と呼ばれる星、涙をたゞへていた星も今日はまるで氷の様に冷かに感じた。時計台の鐘の音までも自分の体を縛りつけて行く様である。「鍋焼うどん」の呼声も、ストーブに対する恋しさを増させる。時に炉辺に熱き紅茶をすゝる味は到底忘れられない。

十月一日 本日小樽、札幌両学生発火演習が軽川に於て行はる。天候稍怪しかりしも、寄宿舎より笹部、野村、柴内、浜本の諸君出場、途中に於て既に小雨来る。尚進みて遂に演習気分は満ち満ちて来た。正に陰雨肅々、砲声轟々の内に怪しくも芝居（文部、陸軍当局の一種の年中遊戯）の一幕は終りを遂げぬ。時に雨は益々激しくなり、寒さは増し、遂に断念して帰路に着く既に二時、帰路びしょぬれ、四時頃皆思い足を引ずりつゝ帰舎しぬ。

宮脇君定山溪に行かる。

二日 月次会

委員 中川、莊保、樋浦、佐々木君

午後五時半会食、宮脇君欠席、七時半開会。

佐々木君開会の辞、大谷君に対する歓迎の辞を述べらる。

時田君 夏休み中に於ける舎生の変化、大谷君歓迎の辞及び卒業期を控えて此の秋冬一大奮斗激励の辞を述べ。又記念祭を十一月に延ばす事を述べ。

笹部君各自の立脚点を広め、己の吾界も拡大せよと、而して舎生活に厳しくとも然りとすると論じ降壇。

平野君 三田評論にありし「日本人の共通欠点として」に就き紹介された。即ち日本人は他人を真似る性質が多く、又表面的に広くして、深くつき込んで究明する性質が乏しいと、例として社会科学学生の検挙事件を上げて説明した。

浜本君 人間には模倣性が必要であり、人間にとって重大である。模倣の極限に於て天才、偉人が生まれると。

平戸君 金峯山行きの大略を語る。甲府より塩山行き（帰路）までの経路を述べ、併せて山の吾常人の考へられざる清々しい吾界について話さる。

樋浦君 夏休みの実習に就て、東京建設清水墜道に行かれた話である。此処は主にコンパクトな岩石よりなる故、コムプレスト エイヤ、及コムプレスト ウォーター又は電氣にてなすも、結局コムプレスト、エイヤによるドルリングを為し約六哩余の全長のものであると、実に馬力数に至るまで詳細に話さる。

山口君 羽越線よりの帰路、時計を盗まれた事、海水浴行き、又山登り等を特意も諧謔を以て語る。最後に欧州に於て葡萄栽培中、盗人に依りて、又害虫に依りて其の量

を減じていたも、或る日その盗捕えんとて硫酸銅と或る薬をまぜた劇薬をその盗人にかけたのである。計らずも其のかけられた所の害虫は皆無くなったのが機会となって現今の害虫を取除く薬が出来たのであると、之よりしても、盗人すら必要のものである、この忖の中に不必要なものはなく、先刻の平野、浜本君共に言ふ事が若いと論ぜられた。「記者註、各自が共に自己独自の駄保羅を吹いているのである。各紙一枚の距離である。」

今井君 伊藤先生（誠哉）との十勝行きのお話をされた。十勝岳の爆発に際しての喜劇と思はれるとのを紹介された。

老人夫婦が家と共に泥流に押流され、無事に家と身を全うした事、泥流がやって来てもう駄目だと思ふている内に流されて漸く気がついて、何だか、かぶさっているので変だと思って腕をのばしたら行李を被っていたとの事。又泥流が来て蚊張にくるまって流され、其の翌日救護隊が来て「此処にも死人がいる」とて蚊張を取り除いたらそれは生きた人間であった事等を語られた。

次に楓の木を主題として、栄華を追いて数奇な運命の道を辿った稚童のお話を語られた。我々に多くの問題を与へた様に思ふ。

中島氏 夏休み中、満州旅行に行かれた話をされた。大和ホテルにて、浴衣がけにてルーフガーデンに行きて給仕に文句を言われた話（それは、ルーフガーデンに行くには、和服の時は必ず羽織と足袋を着用の事が規定であるそう）、大連の道の良き事、自動車の高価なこと等に就て述べ、更に旅順よりハルピンまでの話である。軍人の否日本人の支那人に対する横暴、日本人の商売の下手なる事、日本人独特の仕事なりし大工等の如きも支那人に依ってなされ、日本人は支那人を使って上前をハネテいる事、殆んど支那語も露西亜語も知らずハルピンまでは大丈夫なる事、工科学室の設備は余り良くない事、建物が露西亜の遺物で立派なりし事、農事試験所等も宏大な事。

遂には淫蕩なハルピン夜話に到るまで実に面白かった。又ハルピンより京城に、朝鮮にては当大学の卒業生は殆んど居ない事等、実にユーモアに富むお話を承はった。

宮部先生 中島君のユーモアに富むお話によって自分も話さねばならないとて、先生机を共にせし友人セツチエル博士及びパーカー博士のお話をされた。特にパーカー博士は動物学者で、以前兩人共貧乏だった時に先生が洋行の途次、天保銭を渡して、之を有すれば金に困る事なしと云ふて別れたのである。次に先生が洋行の途次、黙って博士を訪れ、呼鈴をならしてパーカー博士が戸を開くや否や、黙って部屋に飛込まれた。パーカー氏は驚いて先生の爪先より頭まで見上げて「オー、ドクトル ミヤベ ドクトル ミヤベ」と連呼され、其の時に天保銭を出して、實際之を持ってより金に困らないと言はれ、天保銭の文字が殆んどすりへって見へない位だったそうである。

今度は十銭の穴明白銅を託して、之を持っていれば、ラプアーブルのものがよりラプアーブルになると言ってやったから、今度東京に開かれる汎太平洋学術会議で会ふ事になっているから多分面白いだろうと。

其の天保銭の事は日本人が行くと常に其の由来を語るそうである。最後に學術協會、及汎太平洋學術會議のために今月末の記念祭を延ばしてくれれば都合可なるとして直ちに可決さる。

今回の會議にセツチェル氏も来られるそうである。両博士共にアゴヒゲをはやされているのだそう。故に先生が洋行の途次寄られた時にも、「お前もアゴヒゲをはやしているな。日本の偉い人は皆ハヤシテるなあ」等と語られたそうである、それほど又愉快的な人である。次に中島君がハルピンの料理は二倍位あったと言はれたに対して、それは外国に於ては何事も夫婦本位になっている為であり、料理然り、旅屋の部屋、寢室等を語る。

樋浦君閉会の辞を簡単に述べらる。

後多勢君よりメタルに関する提案あり、先生は更に広い範圍の同意を要求するとて期限を此の記念日まで延ばさる。菓子の饗応あり、久し振りにてヘボヌキをなして散会す。

四日 珍しくも快晴、高く天は澄み切りて秋の気分痛切たり。演習のため休校、散歩の如何に清しきを思ふ。冷風スックと立つポプラの頭上を吹き行く。時に四日振りに宮脇君帰舎。

八日 午前中稍々天候悪しかりしも、午後に到りて稍々可となるに及び、午後二時より基督教青年会对青年寄宿舍との庭球戦は開始されたり、我が精鋭十名、齡はとれども尚元氣旺盛、恰も紅顔の美少年を思はせる。

最初吾が軍一時不利に陥るも俄然挽回して一大激戦を演じたるも遂に武運拙く再び敗地に陥るの已むなきに到りたり。特に時田君の撮影（記念写真）振り見物なりき。

戦績は左の如し（略）

閉会后、食事部の饗応に預りて散会す。

十六日 農予科三年生石橋道助君入舎さる。

二十日 午前十一時より汎太平洋學術會議に参加された杏界的碩学の士に対する歓迎會が中央講堂に於て開かれた。松村松年氏の開會に次ぎて田中館氏の紹介で各氏が引見された。先日宮部先生の旧友であるパーカー博士の姿に明らかな印象を受けた。それはすつくりと丈高く快活そうに感ぜられた。

後、佐藤總長の歓迎演説（英語）は得意のズーズー弁で話された。次に謝辞としてカナダ學術協會の會長、米国スタンホード大学教授地質学者ウイリス氏鬚をしごきて立ち、旧懷談を交じて延べられた。

最後に、常なる總長発声のもとに汎太平洋學術會議の「萬歳」を三唱して終る。

二十二日 秋季庭球大会を開く。各員其の意氣當るべからず、澄み切った秋空の下のコートに愉快なる一日を送る。

その戦況左の如し（略） 食事部の色々の心配に依って御馳走を食ふ。

二十三日 寄宿舍生一同、定山溪行を目指し笹部、多勢、平戸、佐々木、中川、石橋、宮脇の諸君先づ先発として行きぬ。他の者達は午後の汽車を頼りて、会するもの、舎外生

及び先輩を加え総勢十六名鹿の湯ホテルに宿す。宿に入るや直ちに湯に飛込む。疲れている時とて手足を蛸の如く延ばして、実に温泉豪遊を思はせるに十分なり。湯より上るや直ちに、持参の食材にて作りし肉鍋をつく。もう入りきれない程の物を頬張る若者あると思えば、超然として独り尚押込む者ある。実に十人十色の内に晩食は終る。直ちに競技大会に移る。結局西軍の勝利となる。其の間、実に色々の競技あり、カルタ、将棋、札、足相撲、指角力、へボ抜き、銭廻はし等に殆んどの興をつくして終える。

出発の際は降雨烈しかりしも、今夕食后となりぬるに及び実に一天一片影の雲方なく澄み渡り、月光皎々たいり。眼下清流ながれて尽くる事なく、永遠の神秘を抱いて一度下りては黄塵の都を浄めんとする。時に月光映ずるに及びては銀粉を撒き散らしたる如く、実に清純、美麗の極、何処に其の比を見出すを得んや。噫、天地有情、偉大莊麗、此処に絶して驚嘆、実に言、文に絶す。目する全ての自然、耳に響く自然、心に映ずる眞の宇宙、祖は醜悪なる人の心を浄化して光明、感激の極みとこそなる。

静寂の天地に一言も発する者なく、只尽きせぬ流れ、或は高く或は低く千変限りなき交響楽の内に悉く寝に就きたり。

二十四日 時々降雨、雪あり、朝来湯に飛び込む者多し。又朝湯の気持は何んとも言へない。心は案外彼方に遊ぶの感がある。又々勝負（協議会）を始めぬ。遂に豆拾ひにて西軍の勝利に帰す。喊声を上げる者あり、沈黙する者あり、愛らしき此の稚氣。

午後四時二十分出發、六時帰舎。第二次会を八時より開きたり。

二日間に亘り長き享樂は終りて吾人は学びの道をめかし、である。

二十七日 予科（工）第一学年彦坂重信君、夜入舎さる。

十一月四日 寒さは烈しからざるも凋落の悲哀、淋しさを痛切に感ずる。風もなきに、ひらりと降り行く木の葉に懐郷の余り涙を滴す者あるらん。星の光は更に澄み輝いて吾々と共に涙をたゞへ、そゞろに楽しき昔偲ばさる。時計台の鐘の音は澄み切った空気に響き渡る。初冬の夜はかなく更け行く。

第二十九回記念祭 [十一月五日]

本寄宿舎創立第二十九年を迎えて記念祭を行ふ。各委員の奔走に依って種々なる催しありたり。来賓十二名にて四時過ぎより記念式を行ひたり。時田君の開会の辞より始、あり・

彦坂、石橋両君の自己紹介と共に、自己の青年寄宿舎の主義実行に対する希望、信念を述べらる。

平戸、浜本の歓迎兼祝辞あり。

笹部氏 石澤氏（本舎の恩人なる）宅に手傳ひに行った時、氏の忠言即ち、今の人には余りに他人から取る主義をなすも、他人に与へねば満足なる生活は為し得ないと。

鈴木氏 常の愛らしい声と共に、色々詩的の事を、而して昔の青年寄宿舎の様子等を語る。

宮部先生 「自分の舎長承諾に事運びたる事より、又自己の一生を貫いた禁酒禁煙に対

する態度、経験を語る」

先生は昨日太平洋学術会議より帰へられ、実に疲れおらるゝに拘らず御出席下された事は、舎生の深く感謝する所である。

先生発声の下に、青年寄宿舍萬才を唱えて後時田君発声の下に宮部先生萬才を三唱す。

樋浦君の閉会の辞で会は終る。

其の後約半時間にて晚餐会を挙行、山海の珍味食ふ事に目のない若者の姿こそ愛らしけれである。午後七時半頃より余興部始まる。十一時半頃終り、一同記念写真を撮った。十二月五日 今日日は日曜と云うに外に出る者もなく、ピンポンに、スキーに興ずる者もいと少き、矢張り試験点取虫の輩か、然れど少年の独り、スケートに初見算致さんとせるに、遂に見果てなき夢か、寒中水泳と早変りせる当り、少年ならではと思う。

此の頃の夜こそ張りきったこぶり（氷）の道を歩む足駄の音、遠くかすかに聞える鍋焼うどんの呼び声とが一層北国の情緒を高める。

然して一入り懐郷の胸ぞ高鳴るこそ愛らしき。

今日特筆大書すべきは、舎の先輩、唯一の強骨漢笹部義一氏芽出度く円山神社に於て結婚式を挙げらる。

十二月十四日 予科専門部の試験第一日なり。

誰しも顔色なく、今日こそその思いをひそめて静々と行く。友よ幸あれかしと祈る。

然れど午後的一幕劇こそ見物なり。「コンディだよ」と沈み勝ちに云う男あると思えば「あの問題を見た時、実に千仞の谷間に落ち込んだ様だった、まだ三学期があるよ」という男あり、「山が外れた感じはなあ」とどよめく観衆、さもあり気の言葉である。

十二月十五日 柴内君実習に行かる。

十二月十六日 月次会を開く。委員平戸、平野、野村、大谷君。

平戸君開会の辞、聖上御不例なる故、舎生の演説を止める旨を述べらる。

時田君、体験、てん末より、初め充分に静養する事と、来年一月十七日、人類の師であり貧児の父であるペスタロッチの百年祭をやる、其れに対する対応に就いて述べる。

宮部先生 聖上階下御不例に対する黙禱を一同と共にす。

直ちに野村君閉会の辞。

メタル図案の当選発表を行う。

十二月二十一日 大谷君帰省、全部試験終る。

十二月二十二日 朝杉本君帰省、その他莊保、笹部、野村の諸君スキー合宿に行く。

段々寄宿舍も寂れて行く。何時もながらの奴は今年はどうしたものか未だ身動きせぬ当り疑し。実に今日は大雪だった。昨晚から降り続いて、優に二尺位は積ったろう。

北国は此の眞白の被り物で甦るのだ、詩の杏界に飛び込んで行くのだ。

十二月二十五日

幾度か御重態を伝えられ七千万国民の赤誠をこめし祈願も効なく、今朝午前一時二十五分葉山御所に神去り給ひぬ。この日寂として声なく悲嘆、悲愁巷に充つ。直ちに攝政

の宮御踐 あらせられ「昭和」と改元せられたる由発表あり。

我が舎にても一同一室に会して厳かに哀悼の意を表した。

昭和元年

十二月二十八日 今朝四時から餅搗きだ。杵の音が白みゆく暁に響く、平和だ。大飯を喰ひ大ばらを吹く人間は概して力がない。

十も杵を持ち上げて脳貧血を起したり、手許定まらず危く他人の頭を割らんとする様な恰好の人、口から泡を吹く奴、とても弱い奴の多い事、青年寄宿舍も意気地のない奴が揃ったものだ。七時前に搗き終る。初雑煮のうまいこと。宮部先生に何時も差し上げのお供へは大に失してその形甚だシュウなり。

十二月二十九日 スキー合宿を終へた笹部、野村、莊保の三君、眼ばかりきら光らせて帰る。健康な若者達の元気が羨しい。

うんとやれ。

十二月三十日

故石澤先生第六回忌に当るので、さゝやかな追悼会を開く。亀井先生御都合悪く出席されず、蜜柑二箱を御届け下さる。七時頃奥田先輩の顔も見え、寄せ書して静岡の令夫人の許へ御見舞する。

信念厚かった典型的基督主義者、北海道に石澤ありと内村鑑三先生の叫びたる宣なる哉。夙に蓄農法を高唱し、彼のなす所よく百年の計を立つ。畜産今後の趨問を見るものよく先生の偉なるを忍ばん。

多勢、笹部、莊保の三君、根室に、郷里に旅立たる。皆停車場に出て雑踏の気分を味ふ。

十二月三十一日

さすがに一年中の総勘定をする月だ、巷は目まぐるしい活動を続けている。野村、平戸両氏は藻岩を登行し、珍しく晴れた石狩の大観を恣にす。

今年は年号の二つある年になってしまった。大正は永遠に帰らない。回顧すべき大きい事件もない。大学の五十年記念祭を最大とすべきか、平凡なる大正十五年も暮れて、望み多き十六年否昭和二年よ来れ。